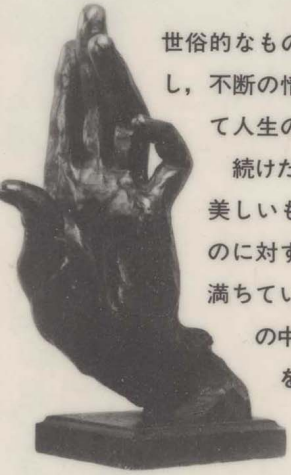
高村光太郎詩集

高村光太郎作



世俗的なものとの妥協を排し，不断の情熱をたぎらせて人生の意味を追求し続けた光太郎の詩は，美しいもの，真実なものに対する善意と愛に満ちている。その歩みの中から93の詩篇を精選し，〈「道程」より〉〈「道程」以後〉〈「智恵子抄」より〉の3部に編んだ。作者(1883－1956)が生前みずから校閲した最後の詩集である。(解説＝奥平英雄)

緑 47-1
岩波文庫

高村光太郎詩集

1955年3月25日　第1刷　発行
1981年3月16日　第29刷改版発行 ©
1984年5月16日　第32刷　発行

定価250円

作　者　高村光太郎（たかむらこうたろう）

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・精興社　製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan

岩波文庫
31-047-1

高村光太郎詩集

高村光太郎作

岩波書店

はしがき

知友、東京国立博物館技官、奥平英雄氏からのお話によつて、岩波文庫版としてこの選詩集は出す気になつた。詩篇の選択、編集、組方、校正まですべて奥平氏の厄介になつた。奥平氏によつて選ばれた詩篇の中から私は更に三、四篇を削除したが、これは自己の旧作に対して、私のやうな気質の人間の誰でもが抱くであらう一種のはにかみと不満とによるものである。実をいふと、自分の旧作をよんでゐて感ずるものは、あれもこれも消してしまひたいやうな衝動である。しかし消しはじめたらきりがなく、結局一篇も採れなくなりさうなので、これくらゐですませた。

時代感覚を保存するために、今日の制限外漢字や旧かな遣ひをそのままにして置いた。詩篇の選択を年代としておよそ「智恵子抄」あたりまでに限定したのは岩波文庫係の意見によるものであり、戦後の詩篇は一切編入されてゐない。尚この集詩篇の制作年代の決定は一々確実な記録によつたのですべて正しい。ただしこの年代は制作年代であつて発表年代ではない。

一九五四年十一月

高村光太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

目　次

「道程」より
失はれたるモナ・リザ(1910, 12)　一一
根付の国(1910, 12)　一四
画室の夜(1911, 1)　一五
寂　寥(1911, 3)　一六
声(1911, 5)　一八
風(1911, 5)　二一
新緑の毒素(1911, 6)　二三
廃頽者より(1911, 6)　二六
『心中宵庚申』(1911, 6)　二三
夏(1911, 6)　三四
けもの(1911, 7)　三六
父の顔(1911, 7)　三七
あをい雨(1912, 6)　三八
夏の夜の食慾(1912, 8)　四三
犬吠の太郎(1912, 9)　四七
さびしきみち(1912, 10)　五一
狂者の詩(1912, 11)　五三
戦　闘(1912, 12)　五七
カフェにて(1913)　六一
山(1913, 11)　六一
冬が来た(1913, 12)　六四
冬の詩(1913, 12)　六五
牛(1913, 12)　七五
道　程(1914, 2)　八二
万物と共に踊る(1914, 3)　八三
秋の祈(1914, 10)　八七

「道程」以後

わが家(1916) 九一
花のひらくやうに(1916) 九二
小　娘(1917) 九三
丸善工場の女工達(1920, 8) 九五
米久の晩餐(1921, 8) 九八
雨にうたるるカテドラル(1921) 一〇二
クリスマスの夜(1922, 1) 一一〇
落葉を浴びて立つ(1922, 11) 一一二
鉄を愛す(1923, 5) 一一七
とげとげなエピグラム(1923) 一二〇
清　廉(1924, 11) 一二二
月曜日のスケルツオ(1925, 1) 一二五
白　熊(1925, 1) 一二七
傷をなめる獅子(1925, 3) 一二九
車中のロダン(1925, 8) 一三二
葱(1925, 12) 一三五
後庭のロダン(1925, 12) 一三六
無口な船長(1925, 12) 一三九
象の銀行(1926, 2) 一四一
十大弟子(1926, 2) 一四二
苛　察(1926, 2) 一四四
ミシエル・オオクレエルを読む(1926, 5) 一四五
火星が出てゐる(1926, 12) 一四七
怒(1927, 3) 一五一
偶作　四篇(1927) 一五二
花下仙人に遇ふ(1927, 4) 一五三
母をおもふ(1927, 8) 一五四
冬の言葉(1927, 12) 一五六
旅にやんで(1928) 一五八

ぼろぼろな駝鳥(1928, 2)　一五九
当然事(1928, 4)　一六〇
首の座(1929, 1)　一六三
孤独が何で珍らしい(1929, 11)　一六四
刃物を研ぐ人(1930, 6)　一六五
のつぽの奴は黙つてゐる(1930, 8)　一六六
偶作　七(1935)　一六八
村山槐多(1935, 9)　一七〇
ばけもの屋敷(1935, 9)　一七二
象(1937, 7)　一七三
孤　坐(1938)　一七四
手紙に添へて(1938, 1)　一七五
団十郎造像由来(1938, 3)　一七六
つゆの夜ふけに(1939, 6)　一七八
冬(1939, 11)　一八二
へんな貧(1939, 12)　一八三
蟬を彫る(1940)　一八五
救世観音を刻む人(1943)　一八六

「智恵子抄」より

人　に(1912, 7)　一九一
郊外の人に(1912, 11)　一九四
深夜の雪(1913, 2)　一九六
人類の泉(1913, 3)　一九八
僕　等(1913, 12)　二〇二
晩　餐(1914, 4)　二〇六
樹下の二人(1923, 3)　二〇八
鮫(1926, 2)　二一一
あなたはだんだんきれいになる(1927, 1)　二一三
あどけない話(1928, 5)　二一四
美の監禁に手渡す者(1931, 3)　二一五

人生遠視(1935, 1)　二二六
風にのる智恵子(1935, 4)　二二六
千鳥と遊ぶ智恵子(1937, 7)　二二七
値ひがたき智恵子(1937, 7)　二二九
山麓の二人(1938, 6)　二三〇
レモン哀歌(1939, 2)　二三二
荒涼たる帰宅(1941, 6)　二三三
亡き人に(1939, 7)　二三四
梅　酒(1940, 3)　二三六

あとがき(奥平英雄)　二三九

「道程」より

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

失はれたるモナ・リザ

モナ・リザは歩み去れり
かの不思議なる微笑に銀の如き顫音を加へて
「よき人になれかし」と
とほく、はかなく、かなしげに
また、凱旋の将軍の夫人が偸視の如き
冷かにしてあたたかなる
銀の如き顫音を加へて
しづやかに、つつましやかに
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
深く被はれたる煤色の仮漆こそ

はれやかに解かれたれ
ながく画堂の壁に閉ぢられたる
額ぶちこそは除かれたれ
敬虔(けいけん)の涙をたたへて
画布(トワアル)にむかひたる
迷ひふかき裏切者の画家こそはかなしけれ
ああ、画家こそははかなけれ
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
心弱く、痛ましけれど
手に権謀の力つよき
昼みれば淡緑に
夜みれば真紅(しんく)なる
かのアレキサンドルの青玉(ぜいぎょく)の如き
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
我が魂を脅し
我が生の燃焼に油をそそぎし
モナ・リザの唇はなほ微笑せり
ねたましきかな
モナ・リザは涙をながさず
ただ東洋の真珠の如き
うるみある淡碧（うすあを）の歯をみせて微笑せり
額ぶちを離れたる
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
かつてその不可思議に心をののき
逃亡を企てし我なれど
ああ、あやしきかな

歩み去るその後かげの慕はしさよ
幻の如く、又阿片を燔く烟の如く
消えなば、いかに悲しからむ
ああ、記念すべき霜月の末の日よ
モナ・リザは歩み去れり

根付の国

頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で、名人三五郎の彫つた根付の様な顔をして
魂をぬかれた様にぼかんとして
自分を知らない、こせこせした
命のやすい
見栄坊な
小さく固まつて、納まり返つた
猿の様な、狐の様な、ももんがあの様な、だぼはぜの様な、麦魚の様な、鬼瓦の様な、

茶碗のかけらの様な日本人

画室の夜

煖炉(ストオブ)の火は消えて
室の四すみよりいつとなく
寒さは電流の如く忍び入る
絹マントルの明るき光は瞬きもせず
物の色より黄を奪へり
乱雑なる画室の様のもの淋しさよ
今もわが頭の中に微笑せる彼の人を思へば
絵具と画布とは児戯に近し
――芸術は唯巧妙なる約束の因襲なるを――
むしろシャヴンヌの画を嗤(わら)つて
一杯の酒(リキウル)に泣かむとす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong